

都市直下型地震 安政江戸地震

安政2年10月2日亥の刻（1855年11月11日22時ころ）、いわゆる安政地震が発生した。震源地にはいろいろな説があるが私は江戸川・荒川の河口付近と考えている。震源の深さは約40～60km。マグニチュードは、従来より少し大き目に見て7.0～7.1くらいであろう。

被害は深川・本所・浅草・下谷・日本橋・上野周辺・曲輪内で大きく、山の手では比較的小さかった。世田谷辺では被害がなかったという記録も残っている。幸いに町方の被害の資料が残っているが、町方総計で死4,741名、傷2,759名、潰家14,346軒+1,724棟、潰土蔵1,410となっている。この建物の被害には焼失も含まれていると思われる。被害は神奈川・千葉・埼玉・茨城などの各県にも及んだが総計は、筆者の見積もり（少なく見積もって）で死7,468名、屋敷・住居の潰1,727棟+15,294軒、半潰4,071軒、破損1,251件に及ぶ。その他土蔵の潰1,736余、半潰749余、破損1,225余である。

また、液状化現象が所々で見られた。亀有では損3万石、田畑に小山や沼が出来たという。江戸川区桑川町ではすさまじい液状化現象が見られた（古文書に「地裂巾二三尺、水沸騰すること道路にて膝に及ぶ」と記してある）。埼玉県の手付近の52ヶ村では合計で家数5,041、そのうち潰は僅かに17軒、潰同様3,248で、その他は残らず破損したという。そして死者はなかったらしい。このように振動そのものによる被害は少なく、潰同様が非常に多いということは、この村々が田圃地帯であることと考え合わせると、強い液状化現象が現れたのではないかとと思われる。

震後、江戸では30ヶ所余から出火した。幕府が作った焼失地域や出火点を示す詳細な絵図が残っている。そのうちの一部分を口絵裏面に図示しておいた（図中・は出火点、点線は焼失区域）。これによると、焼失面積は長2里19町余、巾平均2町余となり、関東地震の時の焼失面積の凡そ20分

の1に当たる（図とかわら版の終わりの所にある焼失屋敷を照合すると、かわら版の情報が正しいことがわかる）。

かわら版の文字は焼失した場所（町名・屋敷名）を示し、絵は火災の有様を画いたものである。かわら版の最後に御救小屋（今の避難所）を5ヶ所（1幸橋御門外、2浅草広小路、3上野広小路、4深川海辺新田、5同八幡社内）に建てたことが記されている。これは野宿を余儀なくされている窮民を救うために造られたもので、2と4は10月5日の夕刻、1は翌6日の夕刻に開設され、更に不足となったために3と5が増設された。10月18日までに御救小屋に入った人は2,696人、1人1日3合の米が給せられた。世の中が落ち着いてくると小屋から出る人もいて、翌安政3年1月26日にはすべての御救小屋が閉じられた。この御救小屋には有徳の人から現金・食料品・調味料その他日用品の寄付および髪結いなどの奉仕があった。寄付者の中には新門辰五郎や二代目志ん生の名もみえる。

江戸町奉行の与力であった佐久間長敬の話によると、御救小屋は定受負人に発注することになっていたらしく、定受負人は必要な材料を普段から用意していたし、屋根などは一坪単位で用意していた。千坪位の小屋は半日で完成する仕組が常に用意してあったとのことである。

直下型地震である江戸地震では震動・火災・液状化による被害が目立った。直下型地震ではこの他にも地変あるいはライフラインの供給不能による被害も考えねばならない。災害が多様化する中、地震に対する心構で最も重要なことは、基本を守ることであろう。「地震を恐れず侮らず、正しく理解する」ことが大切である。具体的には自宅の耐震性の向上、家具の固定、火を出さない心構えと近所の協力である。

宇佐美龍夫（うさみ たつお／東京大学名誉教授）

